

巻頭言

人間の可能性を拓く職業リハビリテーションの新時代へ

Unlocking human potential: A new era of vocational rehabilitation

春名 由一郎*

Yuichiro HARUNA

日本の職業リハビリテーションは、いま、「人間の可能性を拓く」変革の黄金期の入り口に立っています。最先端の研究知見と現場力が結集し、多分野が連携する専門支援の基盤が築かれました。一方、社会には「障害者＝働けない少数者、保護の対象」という前世紀の固定観念が根強く、「配慮があれば働ける」という現実との間に深刻なギャップがあります。この構造的なギャップこそが、私たちが乗り越えるべき「古くて新しい課題」であり、同時に、社会全体を変革する大きなチャンスなのです。

「できない理由」から「できる条件」を探る科学的アプローチ

この変革の時代に不可欠なのは、科学的かつ高解像度で現実を捉え直す視点です。障害のある人が働けるかは、個人の特性だけでなく、職種、職場環境、働き方、支援技術など多様な要因が動的に関わる問題であり、専門支援者もその一部なのです。

私たちは、過去の調査研究が「障害者は社会負担が大きい」という誤った認識を広めた可能性も省みるべきです。向き合うべきは、「障害があるから働けない」という結論ではなく、「何があれば、その人がその人らしく働けるのか」という問いです。この「因果の向き」を正しく見極め、誤解や差別が再生産される負の連鎖を断ち切る必要があります。

社会と企業の競争力となる「現代型」支援

障害や慢性疾患、神経多様性のある人々が社会の少数派でなくなった今、職業リハビリテーションは「誰もが活躍できる社会・企業づくり」を牽引する実践へと進化しています。「支援する側／される側」という一方向的な関係を超え、多様な人々が共に働き、必要に応じて柔軟な配慮を講じることが、企業や社会の競争力となります。医療、福祉、教育などの専門職にとっても、本人と職場の双方を就職前から定着後まで支える現代型の職業リハビリテーションが、新たな共通基盤となりつつあります。

制度と現実のギャップを埋める好機

令和7年度から始まる「基礎的研修」や「就労選択支援事業」は、福祉と雇用の分野横断的連携を象徴する取組で、日本の障害者就労支援が新たなステージに入った節目。これらの仕組みは、支援者が共通基盤で連携し、利用者が希望や適性に応じた働き方を選べる社会への大きな一歩です。

また、海外の先進事例から学ぶ「後発優位」のチャンスも手にしています。海外では、「配慮があれば働ける」人々を制度上明確に位置づけてインクルーシブな雇用を拡大しつつ、真に支援が必要な層へ資源を集中させる社会設計が進んでいます。雇用率制度も、単なる「数合わせ」ではなく、「質」を可視化し高めるための制度運用へと転じる時です。

未来を拓く、情熱と科学のまなざし

AIとロボットが多くの仕事を遂行する時代、「仕事」の意味そのものが問い直されます。だからこそ、職業リハビリテーションの知見は、人間ならではの「つながり・創造性・存在意義」といった根源的価値に深く関わり、社会全体に貢献する重要な役割を担います。

皆様一人ひとりが持つ情熱と科学的まなざしこそが、制度と現実のギャップを埋め、誰もが輝く新しい社会の“景色”を描く原動力です。支援する者と支援される者の枠を超え、私たち一人ひとりがこの変革の時代の主役となり、「人間の可能性を拓く支援」を共に創っていくことを心から願っています。

* Next Beingラボ／創設者（前 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター 副統括研究員）
Next Being Lab, Founder
(e-mail : haruna.yuichiro@gmail.com)